

株式会社フレーベル館「保育ナビ」2014年12月号より





園の未来をデザインする

保育ナビ 12

2014

check!

1 02 特別企画

園の未来が見えてくる 保育の夜明け 特別編
 保育図書・保育雑誌編集委員会報告
研修を考える
 —保育の質の向上に向けて—

今回の「保育の夜明け」は、特別編として「研修を考える—保育の質の向上に向けて—」をテーマに、神戸大学大学院・北野幸子准教授指導による京都府舞鶴市の『プロジェクト型保育推進事業 保育の質の向上と可視化～子ども主体の保育・自己肯定感を育む』における研修成果をご紹介します。

check!

2 12 特集

感染症のギモン2014

～園で気になる
 感染症の最新情報～

毎年、対策が必要となる感染症について、今シーズンの流行状況や対策について取り上げます。特に、これから流行の恐れがある感染症情報や「知識のワクチン」の活用など、専門家に聞いた対策のポイントは、この時期にぜひ押さえておきたいことばかりです。



制度・園の動向

02 特別企画 園の未来が見えてくる 保育の夜明け 特別編
 保育図書・保育雑誌編集委員会報告
研修を考える —保育の質の向上に向けて—

08 もっと知りたい! 認定こども園
福島県西白河郡・認定こども園 ポプラの木

26 国の動きを読む! 研究者の目
新制度における利用者負担のあり方

12 **特集**
感染症のギモン2014
 ～園で気になる感染症の最新情報～

園経営

28 経営みらい塾NEXT
 新しい認定こども園制度から見るこれからの保育のポイント
認定こども園のマネジメント

30 人事・労務Q&A 法律的にどっちがセーフ?
産休・育休・介護休暇

32 2代目世代の悩み相談
野菜どろぼう

33 私の「新任時代」
父と仏教から、心を受け継ぐ
 福島県・学校法人まこと学園 理事長 楠洋興(くすのきひろおき)先生





北野幸子先生
神戸大学大学院
准教授

発表の要旨

〈研究の概要〉

まず、本事業の研修において助言指導した神戸大学大学院・北野幸子先生から、研修をテーマとする今回の編集委員会で舞鶴市の取り組みをご紹介いただくことになった理由を研究の概要とあわせて紹介します。

舞鶴市の取り組みにおける3つのポイント

1年を通して舞鶴市のプロジェクト型保育推進事業の研修に携わり、今回の発表でぜひ紹介させていただきたいと思っただ理由が3つあります。

第1は、今まで保育所での公開保育をしていなかった舞鶴市にお勧めしたところ、公開保育をするようになったということ。

第2は、保育者の専門性を可視化するために記録に力を入れ



「プロジェクト型保育推進事業
保育の質の向上研修 平成25年度
実施報告書」

たということ。1年間、公開後の研修で他の保育者とディスカッションをしたり、実践者ではない私が違う視点でコメントさせていただくことで、保育内容を記録するドキュメンテーションの内容や表現の方法が相当変わりました。

第3に、この事業が公立・私立の枠を越えた取り組みであるという点です。できれば公立・私立の幼稚園も事業に参加していただきたいと思いましたが、昨年度は保育園のみ公私の枠を超えて事業を進めることができました。本年度は、公立幼稚園が部分的に参加。さらに広げていきたいと考えています。

もし、公的な部局に幼児教育アドバイザーが置かれ、指導主事のような役割、つまり、保育の公開や実践の検討を推進できれば、実践内容の監査の機能につながる第一歩になると思います。

保育の質の向上を市の事業として公的

資金を投じて積極的に進めるなど、国の保育界への公的資金拡大につながるモデルケースとしても注目できると思います。

〈事業の特徴・課題〉

次に、舞鶴市保健福祉部子ども未来子ども支援課の飯田美和先生から、事業の特徴、研修の体制や内容、課題についてうかがいました。その要旨を紹介します。

プロジェクト型保育とドキュメンテーション

子ども主体の保育という原点に戻するため、私たちはプロジェクト型保育に注目しました。多くの保育者が研修に参加できるよう、運営は舞鶴保育園長会に委託。一度で終わる研修ではなく、保育の専門家を招き、1



飯田美和先生
舞鶴市保健福祉部
子ども未来室子ども支援課



園の未来が見えてくる

保育の夜明け[★] 特別編

保育図書・保育雑誌 編集委員会報告

保育界で活躍する先生方が様々な視点から保育の未来を考えるこのコーナー。
今回は特別編として、弊社保育図書・保育雑誌編集委員会の模様をお伝えします。

今回のポイント[★]

- 保育の中で記録のもつ意味は大きい
- 子どもの育ちの評価にもつながることを念頭に
- 保育者と研究者とで、今後、記録方法の研究を

Vol.9 研修を考えるー保育の質の向上に向けてー

今回の「保育の夜明け」は特別編として「研修を考えるー保育の質の向上に向けてー」をテーマに、神戸大学大学院・北野幸子准教授指導による京都府舞鶴市の「プロジェクト型保育推進事業」保育の質の向上と可視化「子ども主体の保育・自己肯定感を育む」における研修成果を紹介します。

同事業は行政が公的資金を投入し、実践研修にも積極的にかかわる全国でも先駆的な取り組みです。平成25年度は「保小連携」「可視化・記録」「プロジェクト型保育」という3つのキーワードのもと、舞鶴保育園長会がまとめ役となり、民間・公立合わせて16の保育園（所）が参加しました。

8月18日に行われた保育図書・保育雑誌編集委員会では、北野先生と舞鶴市子ども未来室子ども支援課の飯田美和先生より、研修体制とプロジェクト型保育の実践事例の発表がありました。ここでは保育事例^{*1}は割愛し、研修に焦点を当ててご紹介します。

*1 実践事例は、実施報告書内に記載されています。



編集委員・オブザーバー 発言の要旨

今回の編集委員会に出席いただいた先生方からの質問と発表者とのやりとりについて発言要旨を紹介します。



事業のきっかけは？

大豆生田啓友先生
(玉川大学)

質問

そもそもこの事業を始めたいきっかけは何だったのでしょうか。また、この1年で何か大きく変わりましたか？

回答(飯田先生)

これまでも研修は行ってきましたが、園内の自助努力には限界があり、保育の質を上げるには、専門家の指導が必要でした。また、1つの園だけではなく市全体で、園の枠を超えて高め合えるような研修事業が必要と感じ、子ども未来室の中でチームを組み、北野先生の研究室を訪れたのが最初です。

回答(北野先生)

研修前後を比較して、大きく変わったのはドキュメンテーションの内容や表現の方法です。最初は事実と感想を記すだけだったものが、育ちの見通しやこれまでの経緯の説明など、成長のプロセスがしっかり書けるようになりました。選ぶ写真も最初はポートレート風だったものが、子どもの目線の先のようなものになりました。

保育者の子どもを見る視点が変わり、記録の方法や技術も変わったのです。ドキュメンテーションを見た保護者が「これは教育なのだ」と理解してくださり、保護者の理解が高まったことも大きな変化です。最初は自分の子どもが写っているかどうか主であった保護者の関心が、活動を通して子どもにどのような力がついていたのか、それは保育とどう関係しているのかという視点に変わりました。



研修の原動力となったものは？

大日向雅美先生
(恵泉女学園大学大学院)

質問

研究と実践の連携を行政がしっかり理解して協力されていることがとても新鮮です。研究と実践をつなぐという発想はどなたの意見なのかをまずおうかがいしたいです。また、長時間の保育業務をこなしながら、研修を受け、課題もこなし、新たな取り組みを行う保育者の負担はとても大きかったと思います。厳しい環境でも、意欲をもって研修に取り組んだ原動力は何だとお考えですか？

回答(飯田先生)

私は、平成24年に、子ども未来室事務部門に、2人目の保育士経験をもつ職員として配属されました。最初は子育て支援の仕事をしていましたが、行政の保育士として何が出来るかを模索して研究会などに参加するなかで、『研究と実践』をつなぐというキーワードにたどり着きました。自分の役割はこれだと確信しました。

また、北野先生は、保育者や園に対して、評価をしたうえで1つひとつ課題を提示し、自ら気付かせるような指導をされていたので、参加者の研修に対する意識も変わりましたし、意欲的に参加してくれるようになっていきました。いちばん大きかったのは、子ども自身が変わってきたことを保育者が実感できたことかもしれません。

研修で保育者がどう変わった？

汐見稔幸先生
(白梅学園大学)

質問

研修で最も力を入れたというドキュメンテーションについておうかがいします。ドキュメンテーションを書いて、今まで見えなかった子どもの姿が見えてくると、保育がおもしろくなってくるともあります。参加した保育者が大変な研修を乗り切れたのは、この気持ちが生み出す研修システムが効果的に働いたのでしょうか？

回答(北野先生)

ドキュメンテーションを会議室の壁一面に貼り、全員で実践を振り返るのですが、研修を重ねることに皆さん保育に関して多弁になられました。保育が見えると、自分たちは保育のプロであること、保育は子守りではなく大切な次世代育成であること、さらには、保育とは専門家による大切な仕事であることを、保護者や社会に知らせたいという熱い思いが感じられました。自分たちの思いや役割を発信する手段の1つがドキュメンテーションだとの共通認識のもと、よりよい内容にするために、公立・私立の枠を越えた同志だという思いが徐々にグループ内にできた気がします。



(注)プロジェクト型保育の事例の詳細は、舞鶴市HPの報告書やニュースレターにてご覧ください。
http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/ukuship/index.php?content_id=539

★お問い合わせ先★
 舞鶴市保健福祉部 子ども未来室 子ども育成課
 プロジェクト型保育推進事務局
 TEL:0773-66-1009 FAX:0773-62-9E97
 E-mail: k-ikusei@post.city.maizuru.kyoto.jp

年を通して同じメンバーが深く学べる体験をできる機会を提供しました。プロジェクト型保育研修には保育園3園が参加。1年にのべ7回の研修、そのうちの4回は、午前中に公開保育を行い、午後の研修では各園が作成したドキュメンテーションを見ながら全員で意見交換をして、よい点を改善すべき点を学び合いました。初めての公開保育では緊張のあまり子どものかかわり方がわからず、傍観するだけの保育者もいたのですが、北野先生から「一緒に遊び、保育者が遊びのモデルになること」、子どもの興

味・関心を理解し、子どもの意図、要望、次の姿を予測しながら見守る「能動的見守り」を教わったことで、子どもを見る力の向上につながったと思います。

学びのプロセスがわかるドキュメンテーションへ

研修で最も力を入れていたのがドキュメンテーションです。最初は書き方がわからず、「〇〇ができた」という結果と保育者の感想に写真を加えただけといった内容でしたが、指導・助言を受け、発達の視点や今後の見通しの説明など、学びのプロセスがわかる内容に変化していききました。ドキュメンテーションは保育者が保育を振り返るだけでなく、保育者間の情報共有や保護者に保育の中の学びを意識づける役割も果たしました。どうすれば年齢や成長に合った保育計画が立てられるか、子どもの姿から次の展開がイメージできるのかといった疑問や、子どもの育ちや学びを評価する

観点がないなどの課題、きちんとやるには、園長や主任などキーマンとなる人材が重要であることもわかってきました。そして、子どもの姿を見るといつか前のできなければ保育ができるはずがないことを実感させられました。この事業を通して、保育についてはみんなで話し合う素地ができたことは大きな成果だったと思います。今改めて保育のおもしろさ、奥深さを感じています。また、この重要性を保護者や地域に発信していくことも我々の使命と考え、今後、研究者と共に研修に取り組んでいきたいと思っています。



座長
コメント

全員で保育を振り返る仕掛けが必要

無藤 隆先生(白梅学園大学)



ドキュメンテーションの効果で1つ特徴的なのが、保育園の日々の活動に以前はなかったつながりが出てきているということです。ドキュメンテーションを書くことで、保育者が日々の実践を思い出し、今日・明日・その先へとつながり、自らの行動を自覚することができた。保育にはこのつながりが大切です。同時に、これまで当然のこととして、自覚のないまま行っていたことが、ドキュメンテーションを通して改めて掘り起こされた気がします。保育者が自らの実践行動を改めて自覚できたことに大きな意味があります。

ドキュメンテーションを作成し、全員で保育を振り返るといった仕掛けにより、保育者自身が自分に足りない点、身に付けるべき力に気付くことができます。保育にはこの作業が必要です。

オブザーバーの先生からの感想

大豆生田啓友先生(玉川大学)

研究者がかかわってこの事業を始めたことに意義があると思います。新制度では自治体と一緒にシステムを作っていくことが利点なのですが、今は量的なことでは手一杯です。舞鶴市が取り組むこの事業の形は、次のステップに向けた重要なモデルになると思います。少なくとも今後に広がる起点になったことは間違いありません。

砂上史子先生(千葉大学)

専門職の条件は自己評価ができることです。舞鶴市の実践では、現段階では外からの評価によって実践を高めている側面が強いと感じました。今後、自己評価によって実践を向上させる循環が育つことが期待されます。「ドキュメンテーション」という言葉をそのまま定着させるのではなく、実践者の言葉と合わさって舞鶴市発の新しい記録のあり方を生み出すことで、ほかの自治体や園のモデルになってほしいと思います。

矢藤誠慈郎先生(岡崎女子大学)

大豆生田先生がおっしゃったように、ほかの地域のモデルとなるよい取り組みだと思います。危機感から動き出した保育の質の向上をめざす事業を、今後は、砂上先生が指摘された評価の観点を入れながら、システムとして成立させていく必要があるでしょう。その見直しをもっておくと、進む方向性が自ずと決まると思います。

総評

子どもの育ちの評価を見据えて

汐見稔幸先生(白梅学園大学)

保育記録には意味があります。人間の育ちにかかわる保育現場では、身長・体重をはじめ、様々なデータを当然のように記録しています。園の活動を保護者に伝えるコミュニケーションや、初歩的なアカウンタビリティのツールとしての記録もあります。今回のドキュメンテーションはそこを超えたねらいがありました。

なぜ記録にこだわるのか。それは評価のためです。評価があって初めて教育と呼ぶことができることを考えると、保育者が書くラーニングストーリーは、育ちを評価する重要な鍵となります。

ドキュメンテーションは単なる記録ではいけません。子どもの様子を注意深く観察し、今後展開するかもしれない活動の様々な仮説を予測するためにあります。保育者が書く技術を習得できるように、研究者による作成法の研究が今後も必要でしょう。今回発表いただいた舞鶴市の研修のあり方からは、多くの学びがありました。

ドキュメンテーションの意味をどう伝えた？

砂上史子先生(千葉大学)



質問

事業の核であるドキュメンテーションの指導に入る前に、注意点や書き方の条件などについて、どのように説明されましたか？ また、ドキュメンテーションは勉強会で内々に使用するというよりは、人に見せることが前提だったのでしょうか？

回答(北野先生)

最初の勉強会でプロジェクト型保育とは何か、ドキュメンテーションとは何かなど、書き方を含めた概要を説明しました。ドキュメンテーションは単なる事実記録(ドキュメント)ではなく、これまでの経緯があって今があり、この保育が子どもの育ちにどうつながっていくかを書いた記録であることを、何度も丁寧に説明しました。私たちが作るのは事実と感想(思い)を中心とした単なるエピソード記録ではなく、保育のプロとしての業務記録であることを強調しました。ドキュメンテーションは内容を公開することを前提にし、各園の担任の先生がそれぞれ作成したドキュメンテーションを1つひとつ順番に全員で見ながら、約1時間半かけて話し合いました。舞鶴市では、実践の質の向上を図る意味でも、実践しながら実践を考えることが必要不可欠でした。

保育者の変化のプロセスは？

矢藤誠慈郎先生(岡崎女子大学)



質問

研修後に保育の質が劇的に変わった園は、研修を受けた保育者1人ひとりというよりは、園の組織が変わったのではないかと思います。園の職員にも様々なタイプがいるなかで、先生方が実感した変化のプロセスをお聞かせください。また、ドキュメンテーションを書く作業は大変だと思うのですが、研修に参加した保育者の実際の様子を教えてください。

回答(飯田先生)

ドキュメンテーションを書くのは大変ですが、保育記録と一緒にして時間短縮するなどの工夫をしていました。ドキュメンテーションは教室の壁に貼っていますので、上手に書けると自然に目が止まります。保育者間で意見を言い合えるようになったことが組織の変化につながったと思います。最初は仕方なく書いていた方もいたかもしれませんが、今では書くことを楽しんでいる人が増えたように思います。



リーダーの存在が大きいのでは？

小林紀子先生(青山学院大学)

質問

変化を起こすにはリーダーの存在が必要だというお話がありました。本日の発表をうかがい、お2人が研修に参加した保育者たちをリードされた印象を受けました。それは、ドキュメンテーションの捉え方や書き方にも少なからず影響を及ぼしているのではないかと思います。客観的な立場からご覧になっていかがでしたか？



回答(芦田みゆきさん)

舞鶴市保健福祉部子ども未来室子ども育成課保育係

北野先生の指導や助言で参加者がまとまり、やる気が出たのは確かで、事業を進めるうえでとても大きな存在でした。的確でストレートな指導をされる北野先生と、普段は先生を支える飯田が時には前に出るなど2人で場の雰囲気をつくることで、指導を受ける園側も和み、意見が入りやすかったのではないかと思います。



回答(森輝明さん)

舞鶴市教育委員会教育総務課管理係

私たち事務職は、机上で施策を考えるのではなく、現場を見て、現場の声を聞いて施策を実現していくことが大事だと思っています。お2人や現場の先生方の保育への熱意に直に触れ、施策に反映できるよう努力を続けなければとの思いを強くしました。



日常的に継続していくには？

師岡章先生(白梅学園大学)

質問

新しい取り組みを実践したことによる変化・成果は確かにあったと思います。ただ、この事業が一区切りついた後は一体どうなるのか。このプロジェクトを日常的に継続していくために必要な方法や条件はなんだとお考えですか？

回答(北野先生)

ドキュメンテーションとは何かを初めて学ばれた先生も多かったのですが、この1年ですばらしい表現力をつけられた先生がおられました。早速この人を中心に有効な勉強会をされている園があります。リーダーが中心となり、先輩・後輩で話し合うなかで同僚性が育まれ、リーダーの的確な助言・指導は若手の人材育成にもつながります。これがまさに継続を可能とするのではないかと考えます。

園によって変化に差はあった？

増田まゆみ先生(東京家政大学)



質問

北野先生が指導された保育園では、保育者の実践力が向上したり、保護者との関係性が深まったり、プラスの変化があったとのことですが、わずか1年で劇的に変わった園にはどのような要素があるのでしょうか。逆に、あまり成果が表れなかった園もあったのでしょうか？

回答(北野先生)

1年を通して研修に参加した3園すべてで変化が見られ、私自身がよい勉強の機会をいただいたことを深く感謝しています。ただ、もともと子どもを主体とした保育を行ってきた園と、設定型の保育を行ってきた園では、スタート時点でプロジェクト型保育に対する考え方や理解に差があり、変化のスピードにも少し差があったように思います。

リーダーシップも大切ですが、それに加えて、保育者間の同僚性が育まれることの大切さを考えさせられました。

回答(飯田先生)

劇的に変わるところと少しずつ変わるところと、スピードの違いはありましたが、3園ともそれぞれに変化が見られたことが今回の大きな成果だと思います。

保護者とのパイプ作りは？

大澤力先生(東京家政大学)



質問

仕事と育児で忙しく、関係性を深めることがなかなか難しい保育園の保護者とのパイプ作りで、研修をきっかけに工夫された点があれば教えてください。

回答(飯田先生)

ある園では、「〇〇ができた」など、結果のみを伝えていた園便りやクラス便りも、ドキュメンテーションの手法を応用することで、内容が一変しました。クラス懇談会ではスライドショーで写真を見せながら、保育者が活動の目的や子どもの様子、成長を語るようになりました。時系列で増えていくドキュメンテーションを見ることで、親は子どもの保育園での活動を知り、家でも会話が弾むなど、保護者と園のつながりができました。

回答(北野先生)

新しい取り組みとして、その日の活動から1つを選び、その活動が教育であると保護者に理解してもらえるようなメッセージを、玄関先の告知ボードに掲示するよう提案しました。より多くの保護者が読みやすいように、長文はさけ、例えば1行半で書いてみようといった工夫を促しました。研修では、保育が単なる子守りではなく教育であることを短い文章の中でいかに伝えるか、まるで作戦会議でもするように全員で知恵を絞りました。